

「スタンド・アップ」

みなさん、おはようございます。昨日、近畿・東海地方も梅雨明け宣言が出されて、連日大変蒸し暑い日々が続いています。また、いよいよ今週23日(金)から東京オリンピックが開幕となりますが、東京をはじめとして、大阪でも感染者の数が増加傾向にあることが大変懸念されています。現在、一時的に滞っているワクチン接種が、あらゆる世代に行き渡ることを祈るばかりです。来月8月は平和について共に考え、祈る月であります。57年ぶりに日本で行われる東京オリンピックが、不安や混乱をもたらすものではなく、本来の理念の通り、平和の祭典となりますように心から祈るものであります。

さて、今朝の聖書箇所はマルコの福音書5章の後半最後の部分、35節～となりますが、前回の場面では、会堂長ヤイロが一刻を争う危篤の娘を癒やして欲しいと懇願する様子についてみました。主イエスは直ちに、ヤイロの切なる願いを聞き入れて、彼の家へと向かう途中、12年もの間、長血を患っていた女性が癒やされる様子について書かれていました。彼女は出血が止まらないという不治の病のために、12年という長きに渡って苦しみ続けてきましたが、主イエスが行われた様々な奇跡のみ業を耳にし、大胆な行動に出たのであります。それは主イエスと弟子たちの一行がヤイロの家へと向かう道すがら、大勢の人混みにまぎれて主のみ許に近づき、背後から主イエスの着物に触れるというものであります。するとどうでしょうか。彼女がみ衣に触れたとたんに患部の出血が止まり、癒やされたのであります。せめて、この御方の着物にでも手を触れさえすれば必ず癒やされる、との彼女の強い信仰が、勇気ある行動へと導き、大いなる奇跡をもたらしたのであります。「今、私に触ったには誰か？」との主の呼びかけに対して、恐る恐る進み出た彼女に対して、主は優しく「あなたの信仰があなたを治したのだよ。もう大丈夫だ。いつまでも元気でいるように」(34節)と言われたのであります。

今朝の場面は続く5章の35節からとなりますが、サンドウィッチの中身のように、先の「イエスの服に触れる女」の話が挟み込まれていて、ここから再び、ヤイロの娘がいる彼の家へと向かう様子に切り替わっています。不治の病が癒やされた女性にとっては、主の不思議な力によって癒やされた喜びや感動の余韻にひたる一方で、会堂管理者ヤイロにとっては、わずかな時間も無駄に出来ない緊急事態の時でありました。一分一秒でも早く、主イエスを自宅へと招き、死にかかっている娘の命が長らえますように、との必死で祈る思いであったに違いありません。けれども運命は残酷なものであり、ヤイロと主イエスの耳元に突如飛び込んできた一報は、父ヤイロにとって大変つらく耐えがたい悲報でありました。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」(35節)と、彼の家への使者たちはそのように告げました。おそらくヤイロはその訃報を耳にして、一瞬、頭の中が真っ白になり、呆然と立ちすくんだことであらうでしょう。現代の私たちも、このヤイロのような一刻を争う場面だけでなく、長い人生の中で、突如、私たちの身近な人の訃報を耳にして、しばらくの時間、何も手に付かないというような経験が、多かれ少なかれあるのではないのでしょうか？自分の最愛の家族を、交通事故や自然災害など、突然のトラブルに巻き込まれて、その命を奪われた家族の悲しみは、計り知れないと思います。死はどのようなケースであれ、私たち人間には、どうすることも出来ない冷酷な出来事であると言えます。しかしながら、主イエスはその悲報を耳にした上で、このように言われました。主イエスは父ヤイロに向かって、「恐れることはない。ただ信じなさい」(36節)と告げられたのであります。

主イエスと出会い、主とともに家路に向かっている時は、この御方であるならば、きっと重篤な娘を癒やして下さるに違いないとの信仰に固く立っていたのだと思いますが、状況が一変し、娘が死んだと

の知らせが入った今、もはや、父ヤイロの最後の望みも絶え果て、彼の心は現実を認めたくないという恐れに満ちていたのだと思います。けれども、主イエスは「恐れないうで、私を信じ続けなさい。」と告げられました。その後、主イエスと3名の弟子たち、ペトロとヤコブとヨハネ、そして、ヤイロが彼の家に到着した時、「人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て…」(38節)と書かれていますが、並行箇所であるマタイ9章23節の方では、「笛吹く者たちや騒いでいる群衆たちをご覧になって」と書かれています。一説によれば、この「笛吹く者たち」というのは、葬儀のために雇われた者たちであると言われていいます。新約聖書の時代、ユダヤの国では、貧しい家庭においても、葬儀の際には最低2人の笛吹きと、1人の泣き女を手配するのが常であったと言われます。会堂管理者という社会的な立場から、ヤイロの家には、おそらく何人も笛吹く者たちや泣き女たちが集まり、彼らは大声で泣いたり、わめいたり、大変な騒ぎであったと思われます。この様子をご覧になった主イエスは彼の家の中に入り、「なぜ泣いたり、わめいたりしているのか。子供は死んだのではない。ただ眠っているだけです。」(39節)と言われました。ヤイロの愛娘が息を引き取ったということは、偽らざる事実でありましたが、主は敢えて、それをご存知の上で「眠っているだけです」と言われました。同席した人々は、その主イエスの言葉を耳にして、「イエスをあざ笑った」(40節)と書かれていますが、人々は主イエスの言われた言葉の奥底にある意味を悟ることなく、この人はあまりにも常識はずれであるとして、軽蔑の眼差しで、せせら笑ったのであります。けれども、主イエスにとって、死は眠りと同じであるということが、この直後の出来事によって明らかにされるのであります。主イエスは、周囲の人々の冷たい視線など気にもとめず、皆を家の外に出るようにお命じになり、娘の両親と3人の弟子だけを連れて娘が寝かされた部屋にお入りになりました。そして、主は娘の手を取り、「タリタ・クム」(少女よ、さあ、起きなさい)と言われたのであります。すると、驚くなかれ、少女は突然、眠りから目覚めたかのようにぱっと飛び起きて立ち上がり、歩き出したのであります。主イエスが少女の魂に呼びかけられた「さあ、起きなさい」との言葉は、短い言葉ではありますが、力強く語りかけられ、一度、深い眠りについた少女の魂を、再び呼び起こすことが出来たのであります。

本日の5章後半部分に描かれた会堂管理者ヤイロの娘が生き返るといふこの記事は、現代の私たちにとって、どのようなメッセージを伝えているのでありましようか？それは、人間にとって全く不可能と思えることでも、神様には可能であるということであります。ヤイロの家の使いの者たちが告げた「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしようか。」(35節)との言葉は、喪に服する者たちの失望感や無力感に満ちた思いが込められていますが、主イエスは絶望の淵に突き落とされた父ヤイロに向かって、「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われました。その希望のメッセージは単なる気休めではなく、父の望みが現実となることを教え示すために、主は少女を一言でもって、死の淵から呼び覚まし、生き返らせたのであります。私たちが人生の様々な局面において、失意のどん底に沈むことが、時としてあるかも知れませんが、私たちが絶望の淵から救い出し、再び立ち上がらせ、生きる望みと力、勇気をお与え下さる御方がおられることを本日、心に留めたいと思います。

夏本番へと向かう7月の後半のこの時期も、私たちの信仰の創始者であり、完成者である主イエスを見上げながら、神の備えたもう勝利の栄冠を得るために、私たちは信仰の馳せ場を走り続けてゆきたいと思います。失敗を恐れることなく、その都度、主のみ言葉によって奮い立たせられ、立ち上がる勇気と力、元気をいただきながら、信仰の道を進みゆこうではありませんか。